

曙光



1997. 4. 1

東北大学大学教育研究センター広報 No. 3



L L 教室の授業風景

新入生を迎えて	SCSによる授業風景	14
東北大学総長 阿部 博之	新入生への窓口業務案内	
2	• 窓口の紹介	15
川内で学ぶ皆さんへ	• 窓口開設時間	15
大学教育研究センター長 江幡 武	• 窓口業務内容	15
3	• 川内北キャンパス施設配置図	17
大学教育研究センターの紹介	• 川内北キャンパス教室案内	18
• 大学教育研究センター組織図	• 学生実験室配置図	19
4	川内北キャンパスの交通規制について	20
全学教育担当の思い出	• 川内北キャンパス交通規制図	21
• 文学部教授 佐藤 牧夫	• 仙台市街図・あとがき	22
7		
• 言語文化学部教授 長沼 敏夫		
8		
• 国際文化研究科教授 佐々木 肇		
9		
College の壁を越えたケンブリッジ大学		
• 言語文化学部教授 生出 恭治		
10		



新入生を迎えて

総長 阿部 博之

戦後50年、産官共に、欧米とくに米国で生み出された科学技術の商品化、改良に努力し、今日の繁栄をもたらしました。その反面、ただ乗り論に象徴されるように、科学技術の種をつくり、芽から育てることに熱心でありませんでした。このことは科学技術に限らず、学術のすべてにいえることです。いまわが国は、いわゆる先進国からも、アジアの近隣の国々からも尊敬されない国になりつつあります。大変残念なことです。

さて産学官と書かなかったことに触れましょう。学の中には、欧米の先導的学者と肩を並べる、あるいはそれ以上の創造的業績をのこした学者は少なくありません。とくに東北大学における密度は格段に濃いものであります。しかし残念ながら、わが国として評価の環境づくりを避けてきてしまいました。

このままで良いわけはありません。わが国も未来のために知的財産をつくっていかねばなりません。そのためには、第一に大学の役割を再確認し、整備していかなければなりません。少なくとも欧米の伝統大学、研究大学の役割を担っていく大学が必要であり、とくに研究大学としての実績をもつ東北大学の責任は大きいといえます。

近年受験の秀才で、就職後挫折する若者がふえています。その兆しはすでに大学教育において現れています。大学が高校までと異なる特徴の一つは、文系、理系を問わず、いまだ答が得られていない問題をといていく点にあります。解答のマニュアルは当然のことですが、整備されていません。また応用の科学においては、多くの場合、解答が複数存在します。産業界等で仕事が進まない受験秀才の諸君は、大学においてこのような問題にチャレンジすることを嫌ってきたように思います。

大学に入っても一足跳びに研究の第一線に立ってわけではありません。準備としてのいろいろな勉強が必要です。それぞれの学部の専門教育科目に加えて、全学教育科目も重要な部分をしております。皆さんが将来専門家として、リーダーとして、活躍するために用意されている科目ですが、面白くないものもあるでしょう。注文や意見がありましたら、担当の先生にどしどし質問して下さい。かならずや後輩の諸君への良い影響になるでしょう。

これからの時代のリーダーには、専門性に加えて幅の広さが必要であることを改めて述べておきます。

川内で学ぶ皆さんへ



大学教育研究センター長 江 幡 武

入学おめでとうございます。東北大学での学生生活の第1年目は、主としてここ川内北キャンパスでということになります。

1年目に学ぶ科目には、全学教育科目と各学部の専門科目があります。皆さんに大学に入ったことを実感して、自発的な学習への意欲を高め、持続させる転換教育科目、専門閉塞を避け、広い視野と柔軟な思考力を養うことを目指す教養教育科目、外国語教育科目、基礎教育科目及び保健体育教育科目などが全学教育科目に含まれています。これらの授業をきっかけとして、今後の人生を豊かにし、専門分野の学習・研究に必要な知識を積極的に身に付けて行かれることを期待しています。これまでの高校での学習とは異なり、大学での学生生活では、自発・自立が基本です。自分が興味をもった分野は、どんどん勉強して、困ったり、分からなくなったときには、授業その他で接触する先生、先輩に遠慮なく質問・相談して下さい。

大学での学生生活のもう一つのすばらしいことは、課外活動です。生涯の友人に出会ったり、人生に思いをこらしたり、あるいは社会の仕組みを実体験したりすることができます。第1 Semesterの時間割を全部埋めてしまわずに、仙台近郊の素晴らしい自然を、素晴らしい季節に楽しんだり、友人を作ったり、読書することに、貴重な青春の時間を残して下さい。

とは言うものの、初めて親元を離れて、自立した生活を送ることに、戸惑う諸君も少なくないはずですが。学校に行けなくなったり、周りすべてが灰色に見えて興味がもてなくなったりしたときは、迷わずにクラス担任の先生、サークルの指導教官あるいは学生相談所に相談して下さい。

皆さんの中のかなりの部分は、21世紀第1年に学士の学位を得ることになります。世界の中の日本、日本の中の東北大学のおかれている状況を考えると、皆さんが内容豊かな大学生活を送り、広い視野と十分な専門知識を身に付けることは、とても大切な事です。

大学教育研究センターの紹介

東北大学では平成5年4月から新カリキュラムに則った教育が行われております。すなわち、これまでの一般教育科目及び専門教育科目の区分を見直して、教育内容に応じて「全学教育科目」と「専門教育科目」に改編し、できるだけ4年ないし6年の一貫したカリキュラムを目指すと共に、カリキュラムの選択に多様性をもたらすなどの目的から Semester 制を採用しました。またこれまでの教養部制度を廃止し、一年生は入学当初から各学部にも所属することとなりました。

「全学教育科目」は全学の教官が協力して担当することとなり、その効果は教育を活性化し、教育の多様化をもたらすものと期待されております。近年の、急激な科学技術の発展、学術研究の高度化・細分化、社会の変化、国際化の進展等に伴い、大学教育のあり方も絶えず問われております。したがって、大学の特色あるカリキュラムを時代の要請に応えつつ編成するには、大学教育に関する不断の情報収集と分析、その成果のカリキュラムへの反映が求められております。

大学教育研究センターは、この要請に対応して(1)全学教育科目の企画・実施組織(2)大学教育に関する研究組織、の二面性を保有する学内共同教育研究施設と位置づけられています。

同センターでは「全学教育科目」を開講しています。その新カリキュラムの理念としては(1)狭い専門領域に捉われない広い視野と柔軟な思考力を養う役割(2)専門教育のための基礎的素養を養う役割(3)大学教育のイニジェーションの役割、を挙げることができ、具体的には、「転換教育科目」、「教養教育科目」、「基礎教育科目」、

「外国語教育科目」、「保健体育教育科目」にそれぞれ反映されています。

以下に、それぞれについて説明します。

○転換教育科目は、上記理念の(3)の役割を大きく取り入れた科目です。すなわち、新入生の期待と意気込みに応え、学習意欲を高め持続させるために必要な情報の提供と、これらの大学生活に向けての意識改革を促すための教育なのです。

この科目は、次の2つに分けられて、主に1年次学生を対象にして実施されます。

(1) 転換教育科目A：学部ごとに、所属学生を対象に開設する授業科目です。

「文化人類学入門」、「教育総合セミナー」、「経済学入門」、「現代数学入門」、「肉眼解剖学及び実習」、「歯の解剖学」、「薬学セミナー」、「創理工学」、「農学概論」などがあります。

(2) 転換教育科目B：学部にかかわらず、所属学生以外をも対象に開設する少人数の授業科目です。

「行動科学の考え方」、「くらしと技術」、「社会への視座」、「欧米文学理論」、「インド学入門」、「動物行動学」、「ヨーロッパの歴史と現代」などがあります。

○教養教育科目は、上記理念の(1)の役割を取り入れた科目です。すなわち、人文、社会、自然科学の諸領域の思考方法などを幅広く学ぶことによって、専門に捉われない広い視野と柔軟な思考力を養うための教育として位置づけられます。

この科目は、次の5つのカテゴリーに分けられています。

- (1) 複数文化と国際事情
「英米文化論」、「言語文化論」、「日本語特論」
- (2) 言語・思想・歴史の探究
「日本の言葉と文学」、「中国の文学と思想」、「論理の世界」、「西洋の哲学思想」、「西洋の倫理思想」、「行為の理論」、「歴史と文化」、「サンスクリット語」、「ギリシア語」、「ラテン語」、「アラビア語」
- (3) 人間と社会の科学
「心の科学」、「芸術の世界」、「宗教の科学」、「文化人類学」、「社会の科学」、「地域と環境」、「日本国憲法」
- (4) 自然の理解と分析
「数学の世界」、「社会の数理」、「物理学の進歩」、「フロンティア物理学」、「物質の科学」、「環境と生活の科学」、「バイオサイエンス」、「宇宙の科学」、「地球環境科学」、「情報処理概論」
- (5) 総合科目
「アメリカ研究総合」、「地域文化総合」、「現代社会論」、「エネルギー資源論」、「自然環境論」、「情報科学」
なお、このほかに、外国人留学生のための教養教育科目として「日本事情」が開設されています。
○基礎教育科目は、上記理念の(2)の役割を取り入れた科目です。すなわち、専門教育科目の学習に直結する科目及びこれと隣接する科目として位置づけ開設されています。
- (1) 数 学
「数学」、「数理統計学」、「解析学」、「数学物理学演習」、「線形代数学」、「離散数学」
- (2) 物 理 学
「物理学」、「物理学特論」、「天文学」、「地球惑星物理学」、「物理学実験」
- (3) 化 学
「化学」、「化学実験」

- (4) 生 物 学
「生物科学」、「生物科学実験」
- (5) 地 学
「地圏環境科学」、「地理学」、「地球物質科学」、「地学実験」
- (6) 情 報
「情報処理概論」、「情報処理演習」
- (7) 文 系
「哲学概論」、「社会学概論」、「社会学講読」、「倫理学講読」、「経済書講読」

○外国語教育科目は、外国語の読み、書き、話し、聞くという4要素について、既に習得した外国語の能力を高めること、初めて学ぶ外国語の基礎を身に着けること、及び外国語の学習を通じて外国文化に接し、それによって外国文化を理解する能力を高めることを目的として開設されています。

科目として、以下のものが開設されています。

- (1)英語(2)ドイツ語(3)フランス語(4)ロシア語(5)スペイン語(6)中国語(7)朝鮮語

なお、このほかに、外国人留学生のための外国語教育科目として「日本語」が開設されています。

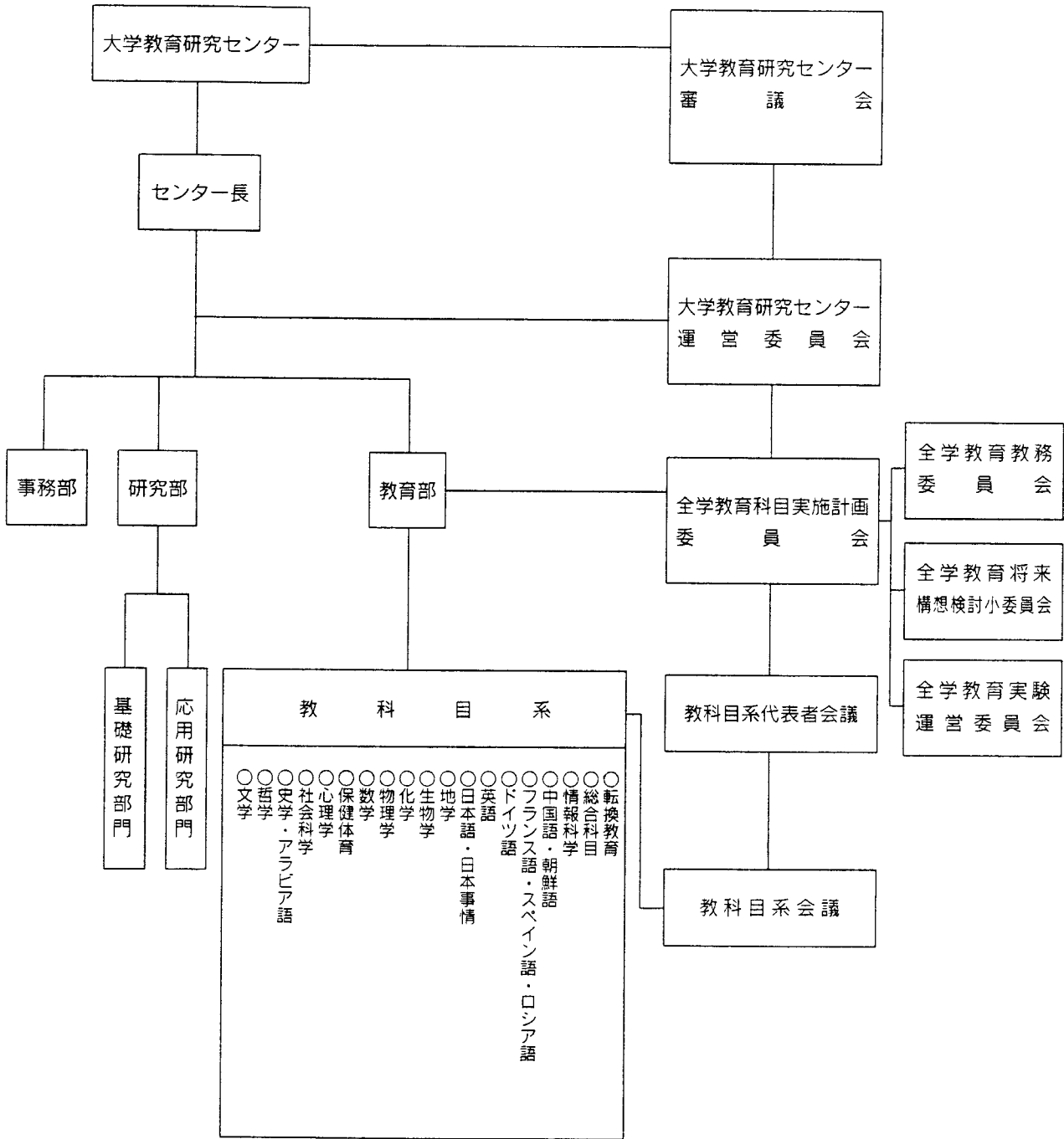
○保健体育教育科目は、スポーツ実技による健康な身体を造るだけでなく、運動理論、健康教育、更には文化的な要素を含む広がりのある教育を行います。

開設する科目は、次のとおりです。

- 「スポーツの科学」、「身体の文化と科学」
○資格取得のための科目は、教員免許状取得のために、次のものを開設しています。
「教育原理」、「教育心理学」、「人間関係論」、「相談心理学」

以下に、大学教育研究センターの組織図を示す。

大学教育研究センター組織図



全学教育担当の思い出



二つの目、二つの心

文学部教授 佐藤 牧 夫

会議の席で隣合わせたS先生にモンゴル語への関心を漏らしたことから、西洋史のH先生と若い言語学徒Y氏と私の三人で、夏休も冬休もなく隔週土曜日の午後、S先生の研究室でこの言葉を学ぶことになった。外国人研究者に日本語を教えるS先生はモンゴル語が専門である。外国人学習者用にラウンバートルで作られた教科書を使って平成三年三月九日に始まったこの教室は翌四年三月七日に最後の課を終えるが、それは他大学へ転ずるS先生とのお別れでもあった。後に残った初学者三人は文学作品挑戦を志すものの、ジュール・ヴェルヌ『八十日間世界一周』のモンゴル訳しか見つけられなかった。それは苦勞して読み解いた長い長い文章がフランス語原文のどこに対応しているのか実にしばしば不明な「翻訳」だった。三人が持ち寄る辞書も文法書も初学者の迷いを解いてはくれず、秋十月、私たちは疲れはてて白旗をかかげた。その間、カタログから新刊近刊書を拾っていろいろ注文したが、取次店の危惧どおり、草原の国から一冊の物語も詩集も絵本も送られてこなかった。この事情は今も変わらぬらしい。

中世フランス詩人の書いた恋物語が時好に投じ、いくつかの言葉に語り直されている。昨夏、思い立ってその中世アイスランド語版を読んだ。そして先頃、ユトレヒトの古書店の目録に中世スウェーデン語版を発見し喜び勇んで注文したところ、すでに先客があった。中世フランス、

イタリア、ドイツ、オランダ、イギリス、アイスランドの版は入手して、いくつかは読み終えた。だが、中世ギリシャ語（ビザンティウムギリシャ語）版に巡り会う日ははたして来るのだろうか。

第二次大戦の直後にブラジルに亡命したユダヤ系ハンガリー人がポルトガル語で書いた本を、昔、ドイツ語訳から翻訳した。後年、同じ本をポルトガル語からハンガリー語に翻訳した学者をブダペストの自宅に訪ねたことがある。バルカンの言葉がエキゾチックに思われると言う私にハンガリーのロマニストは例えばオランダ語に異国情緒を誘われると語った。そのポルトガル語もハンガリー語も学んだ。定からぬ対象に向けられた、悲哀の色濃い、名伏しがたい憧憬の中で一生を生きるというポルトガル人。風に逆わぬ草木ぶりを演じて、異民族—モンゴル、トルコ、ハプスブルク家、ソ連—支配の歴史を生き抜いてきた強靱なマジール人。言葉で学べばそういう人々が身近になる。親しい友になる。

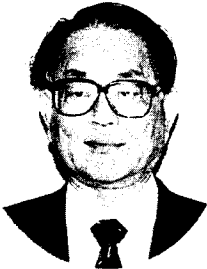
ベルギーの青年と知り合って一年ばかり一緒に中世オランダ文学史を読んでもらった。また、先年は客員教授として在仙していたライデン大学の医学史の先生に私の好きな詩を何篇か読んでいただいた。それは万人にぜひ原文で味わってほしい美しい詩である。

トルコ語を学べば世界を日本人とトルコ人の

二つの目で見えるようになる。そのとき私の目にもオスマントルコの栄光が一段と輝いて見えた。ブルガリア語を勉強すると、ブルガリア人と日本人の二つの心で歴史を受けとめるようになる。私は、今、五世紀の間オスマントルコの圧制に苦しんだブルガリアの人々と悲しみを共にする。『弁明』の原文からソクラテスの肉声が聞こえるように、韓国の書物を原語で読む人の心には、自民族の文化・伝統を誇るこの人達の自信と海を隔てた隣人への批判が濁りなく

伝わってくる。

あのベルギー青年が私も知るセルビア女性とミュンヘンで結婚した。この人の文化を直接知るために私はセルビア語を学び始める。人との結びつき、物語への興味、文字の魅惑的な姿、抗い難い異国情趣、研究上の必要などから言葉と親しんだ。だが、その数は二十に過ぎない。二つの目、二つの心の一つでも多くもちたいと思う。(中世ドイツ文学)



教卓の前と後で

言語文化部教授 長 沼 敏 夫

初めて東北大学第一教養部に足を踏み入れたのはもう40数年も前のことです。「青雲の志」などという筋違いのものは持ち合わせていなかったものの、やはり「ふるさと」といわれるものの懐あるいは桎梏から解放されて、新しいぼくの世界が開けてくるに違いないといった、晴れ晴れとした気分でありました。その当時、校舎は三神峰にありまして、木造二階建ての誠にお粗末なものでしたけれど、ぼくの設計図を夢想するのに特別支障はありませんでした。

あるドイツの小説家の作品に魅せられていたぼくは、この作家のものでも読んで暮らせたらいいなと思い、とりあえずはドイツ語に精を出す決心をしたのですが、面倒な文法と、無限に続きそうな辞書との相談にうんざりして、世の中にとり残されたような気分になったのを覚えています。つまりこの世界にはもっと緊急を要する問題があって、動詞の人称変化など構ってはいられないという思いが、沛然と沸き起こっ

て来たのです。

社会科学系の授業に首を出すと、そこでは社会発展の法則とか必然性とかいうことばが飛び交い、高校時代にあまり得意ではなかった物理の世界が思い出されて、俺の自由はどこにあるなどと憂鬱な思いに駆られたものです。

大学院を卒業して、まもなく幸運にも東北大学の教養部に招かれ、ドイツ語の教師の第一歩を踏み出しました。その時校舎は川内に引っ越してしまっていて、川内分校とよばれていました。そこで真っ先に必要とされたのがドイツ文法の知識です。それまでまあ何となく分かると思っていた言葉が、教えるとなるとそうはいかず、お勉強のやりなおしを余儀なくされたわけです。動詞の人称変化と名詞の格変化とは学習の初歩の2本の柱ですが、「私は木を見る」「君は木を見る」「彼は木を見る」などとは日本語ではあまりいわない。「木が見える」「見えるだろう」「見ているだろう」といういい方がいい方が普通

ではないでしょうか。大体他人の目に映っているものが私に分かるはずはないのですから、「彼は木を見る」と断定的にいうのはどうも憚られる。勿論ぼくたちも、彼が木の方に目を向けていれば、きっと木を見ているのだらうと推量して、しかも大体は当たっているのですが、三つの人称で平等・対等に感覚的な事柄を表現されると、教卓の後に立っている者にとっては何か説明しないといけないかななどと脅迫されているような気分になります。

同じように、不定詞、過去、過去分詞を覚えなさい、とやるわけですが、現在がやがて過去に移り変わるなどといっていると、ではいつから過去になるのだとか、さっきの現在は今どこ

にあるのかなどと質問されると非常に困るわけです。直線を描いて、適当な点を現在とし、その右側は過去とする。しかしそこで分かるのは出来事の先後関係だけです。かつて「木が見える」という経験をしたことを今私は思い起こすことができます。しかし「木が見えた」という過去形の文の内容を思い浮かべることはできません。いづれにせよ、見るから見えるのか、見えるから見るというのか、あるいは「先程の現在」は今どこへいったなどと考えていると、ドイツ語はうまくならないようです。ただひたすら繰り返して覚える、テープの音をできるだけ真似るだけです。頑張りましょう。



東北大学での英語教育

国際文化研究科教授 佐々木 肇

昭和38年4月、思いがけず東北大学川内分校の英語教官として職を得てから、34年の歳月が流れ去ろうとしている。思いがけずというのは、大学院博士課程在学中の前年に、フルブライト全額給費奨学生に選ばれ、7月末の渡米が決定していたので、4月からの就職などはまったく諦めていたからであった。それでも講師として採用され、川内分校で4ヶ月足らず教壇に立ち、その後1年間公用出張という形でペンシルベニア大学大学院で勉強する機会を与えられたのであった。今の大学の採用人事では考えられないことで、時代はそれだけおおらかであったとも言えよう。

翌昭和39年、東京オリンピックの年にわたしが帰国したら、川内分校は制度化の名の下に教

養部に再編されていた。当時の教授会では、すでに教養部改組、もしくは再編ということが議題となり、教官が専門課程を担当できる組織を作ることが論じられていた。教養部改革の議論は、その後の長い、暗い大学紛争の混乱の時期を通して続けられた。そして教養部を中心とする東北大学の改編が、まがりにも実現したのは、数々の紆余曲折を経た後の平成5年の4月であった。教養部での一般教育科目が、全学教育科目となり、教養部もそれと共に姿を消すこととなった。

川内分校に始まり、大学院国際文化研究科に至るまで、所属する組織の名前は変わったが、わたしは一貫して1年生、2年生の英語教育を担当して来た。最初は、大学院文学研究科で学

んだこともあって、わたしの英語の授業も、その教材が文学的なものに偏るものだったと思う。しかし昭和38年夏からの1年間のアメリカ留学が、英語教育についてわたしに一つの認識を与えてくれた。それはわたしがその後かわることになる「アメリカ研究」という学問研究領域とも関連するのであるが、言語というものは文化を反映するものであり、その背後にその言語を母国語として話す人びとと、彼らの持つ歴史や社会があり、言語もそれを使う人間と同じように生き続けているという認識であった。

したがって英語教師として、わたしは教室では英語の背後にあるもの、簡単に言うならばアメリカやイギリス文化、もしくは英米事情をできるだけ教え伝えることを、英語教育の土台に据えて来たつもりである。教室では講読、英作文、L.L.、英語演習、そしてアメリカ研究総合と、殆どすべての科目を担当したが、特に忘れられないのは昭和40年代の前半に、当時の同僚の池谷 彰氏と共に、まとめ役となって行った英語教科目の再編である。新しく創設された自由聴講科目のわたしの「英語演習」に出席した当時の学生の一人が、近年東京大学教養学部の英語教科目の再編に中心的役割を果たした佐藤良明氏であることに妙な縁を感じる。

教養部での英語の授業とは別に、昭和43年の夏から三夏試みた「英語集中訓練 (I.T.C)」も記憶に残る思い出である。当時の大学英語教育のあり方を模索する試みとして、財界を中心として財団法人語学教育振興会が設立され、全国の大学の英語教官に一夏200時間の英語集中訓練への参加を呼びかけた。東北大学からは同僚

の大友芳郎氏とわたしが応募し、3年間にわたって助成金を得た。参加者は学部学年を問わず、人数は一夏16名に絞った。英語を使用言語とし、アメリカ人インフォーマントの協力を得ての、2週間140時間の合宿を含むこの200時間の訓練成果は著しく、当時の参加者の多くが、世界的な場面で現在活躍中である。その一人が、ノース・カロライナ大学医学部教授の前田信代氏である。

東北大学学友会の E.S.S. (English Speaking Society) は長い歴史を誇る部であるが、前部長の吉良松夫氏の跡を引き継いで、昭和45年4月以来27年の長きにわたって、わたしは部長として部の活動にかかわらせていただいた。そこでもわたしは文化理解の大切さをことあるごとに強調して来たつもりである。かつての部員の多くが、国際的な舞台で活躍中であることは言うまでもない。

英語教官を含め、外国語教官は少なくとも10年に1回くらいは海外研修や海外体験が絶対不可欠の要件である、というのがわたしの信念である。幸いに、わたしはその後昭和47年、昭和57年、昭和63年と、都合4回のアメリカでの長期研究・研修の機会を持つことができたが、これらの機会が、英語教官としてのわたしを支えてくれたと言っても過言ではない。

最後に、東北大学の英語教官であったことを誇りに思うと共に、英語の授業を通し、また教室外での活動を通して、実に多くのすばらしい学生諸君に巡り合えたことを喜び感謝しつつ、今わたしは東北大学を去ろうとしている。

(1997. 2.10)

College の壁を越えたケンブリッジ大学

言語文化部教授 生 出 恭 治

ロンドン滞在中の一昨年秋、知人に招かれてケンブリッジ大学を訪れた。帰宅して直ぐ、その折り手に入れた“Cambridge in Brief”という50ページ足らずの小冊子を読んでいて、思わず膝を打った。数年前にカリキュラム改編の仕事を手がけた時夢に終わったことの一つが、ケンブリッジ大学では、いくつかの困難を乗り越えて、既に現実のものになっていることを知ったからである。

ケンブリッジ大学の理系は特に充実しており、理学、医学、工学等の分野は世界的にその名を轟かせているが、その契機となったのは、1847年に（名誉）総長に就任した Prince Albert (Victoria女王の夫君) が着手した改革であり、没後10年を経た1870年代になってその成果が現れたとのことである。前記の小冊子は、その結実を、「ケンブリッジ大学の理系で特に目立つ特徴の一つは、“the most distinguished professors”の多くが、各専門分野における最新の発展への導入として、一年次学生に特別講義をすることを厭わないことである。」と記している。しかも、注目に値するのは、その理由はともかくとして、これが、College basisではなく、University basisで実施されていることであり、1926年以降は文系でもこの方式が採用されているとのことである。巻末に付された1904年から1984年までのノーベル賞受賞者は、

実に65人の多きを数えるが、この間に何らかの因果関係がありそうだと考えるのは、牽強付会であろうか。もとより、大学の成り立ちや組織編成が、本学とケンブリッジ大学とでは明らかに異なる点はあるが、そのことが、教育の理念と vision を共有することを不可能にするとは考えられない。

外国語教育を担当して27年間を1・2年生と過ごして来て感じることは数多あるが、入学当初の教育がその後の学生生活を決定する程重要であることは、衆目の一致するところであろう。特に、いかなる motivation のもとに学生生活を送るかは、個々の学生の将来を決定する重要な要因となるはずである。明日のカリキュラムを実務的に検討することも確かに重要ではあるが、現行のカリキュラムの枠組みを越え、将来に向けて、教育に対する大学としてのより大きな vision を打ち立てることも、併せて重要な課題となるのではないであろうか。

なお、「東北大学も同じシステムになっていると思っていた。」と仰る同僚の一人 Jeremy Simmons 先生は、大変好都合なことに、ケンブリッジ大学の卒業生であられる。このシステムのもとで教育を受けた貴重な証人として、以下に、ケンブリッジ大学に学んだ折りの体験談をご披露願うことにしたい。

A Student's View of the Cambridge Curriculum

The Times of London's annual survey of British universities, which makes use of government research and measures teaching standards, exam results, entry qualifications and other relevant matters has placed Cambridge University at the top of its league table for the past four years. Cambridge was also the only university in England that saw the number of applicants to its courses increase in 1995. There are many reasons for this success, including its long tradition of excellence and the historic architecture in a calm market town atmosphere, something which the local council has been at pains to maintain. However students in England choose their university for a variety of reasons and the content of the course is of central importance.

During my time at the university, the humanities curricula were based on two teaching styles, the lecture and the supervision.

Lectures were held at faculty level although in theory a student could attend any lecture given by any faculty at any time. The lecturer had two responsibilities, to lecture on her subject and to provide a reading list of sources upon which the lecture was based. Attendance was not compulsory and of the three hundred or so students in my year attendance varied with the subject from twenty to three hundred. The primary criteria for

deciding whether to attend was the relevance of both lecture and subject to what a student wanted to study. The optional International Law courses were always more faithfully attended than compulsory lectures in Roman Law. Right from the start, the university's leading experts had responsibility for these programs. The contents of more complex lectures could often be reviewed later in the academic journals.

Supervisions were more personal. Lessons, at what is considered high school level in Japan, had been in class sizes no greater than ten. At Cambridge, supervisions, which were held in the lecturers' offices, usually consisted of 2-4 students. My Labour Law supervisor actually apologized to his students, because, due to the popularity of the course, some of us had to sit on the floor to take his class. There were not enough chairs for all six of us!

These classes were held as discussions, with questions to prepare, and a reading list to complete each week. Discussion was fairly wide-ranging although the supervisor tended to have certain matters which he wanted to ensure that the students had understood. Particular problems that students had found were also dealt with quite freely and could become the main part of the lesson. Because of the sheer number of supervisions that had to be taught, there was a wider variety of

university staff involved. Some students were supervised by their lecturer. At the other end of the range and especially in the natural sciences, research assistants might be called upon. Looking back through my supervisors, although not necessarily related to the field we studied together, by now almost all of them have written major textbooks in at least one field.

Each supervisor would give out perhaps two or three written assignments a year, yet there was never any clear sense that one was preparing for exams. On the contrary, a student's understanding of his subject would be developed to the extent that she could deal with any question that might appear, not only in an exam but at anytime in the future.

Official classes in the humanities tended to be small in number. Five subjects per year, two lectures in each subject per week and one supervision per fortnight seem a very small number when compared to the Japanese system. However, the libraries always seemed to be too small. The size of supervisions made it almost impossible to successfully attend without preparation and

while free discussion was encouraged, empty headedness was not.

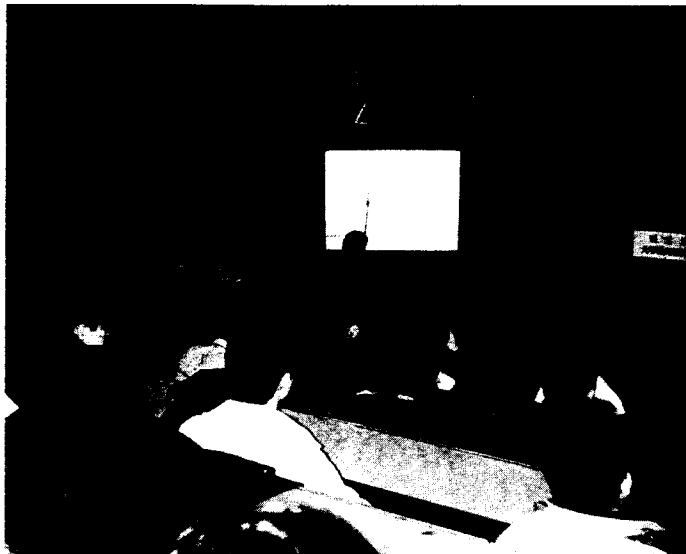
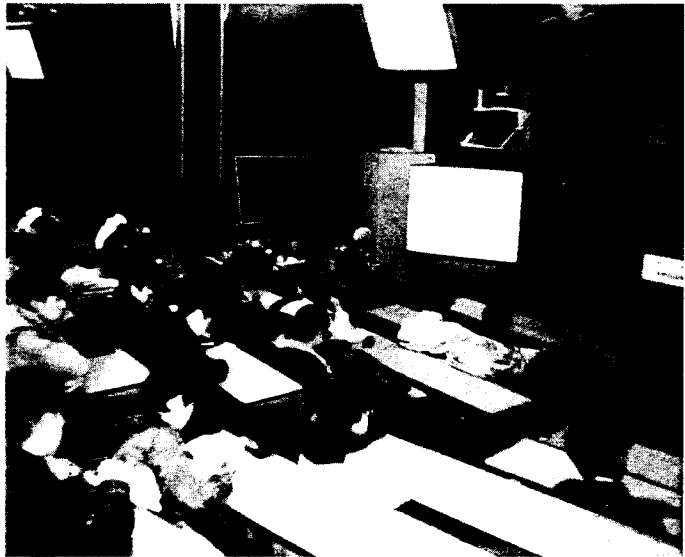
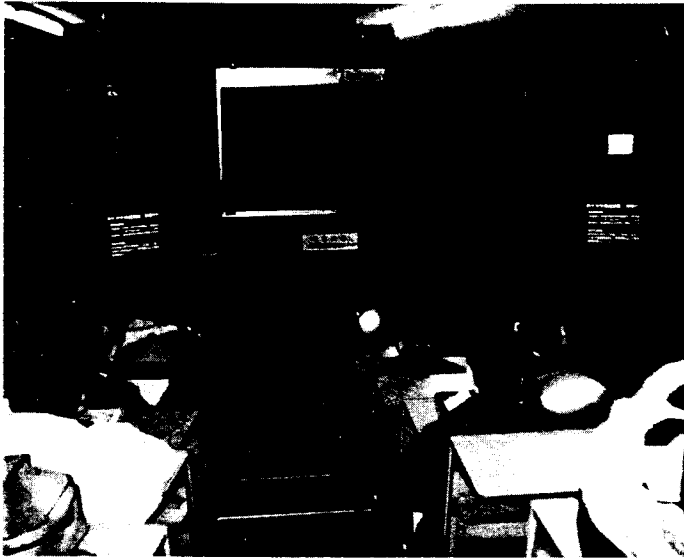
Looking back, the thing that strikes me most is the level of independence granted to the student. Everyone knew that they would have to show how well they had understood their assignments to one of the country's (and sometimes the world's) leading experts. Yet there was very little attempt by the staff to ensure that work was done. It was just assumed that a student would be ready to answer whatever a supervisor threw out, especially when the exams came round.

The responsibility for learning was with the student not the teacher. In consequence students, forced to learn, put pressure on their supervisors to provide the necessary insight to enable them to understand their subject. At the same time the supervisor would challenge the students individually to reveal they actually had understood. The freedom to challenge works both ways, ensuring that both students and staff are at their peak for the intellectual tussles of university life.

(Faculty of Language and Culture

Jeremy Simmons)

SCSによる授業風景



新生への窓口業務案内

新生の皆さん、これから、川内北キャンパスで修学する2年間、皆さんが事務手続きを行う所は、国際文化研究科等事務部の教務第一掛、教務第二掛それに経理掛及び学生部の学生第二掛にわたります。以下に、各窓口での事務手続きの概要を紹介します。

○窓口の紹介

- 学生生活関係担当：学生第二掛（管理棟1階、窓口番号1・2・3・4番）
- 履修、授業関係担当：教務第一掛（管理棟2階、窓口番号6・7番＝「理・医・歯・薬・工・農各学部担当」、窓口番号8番＝「文・教育・法・経済各学部担当」）
- 授業料関係担当：経理掛（管理棟2階、窓口番号9番）

○窓口開設時間

- 「学生生活関係担当」及び「履修、授業関係担当」
8：45～12：30、
13：30～16：45、
- 「授業料関係担当」
8：45～12：30、
13：30～16：00、

○窓口業務内容

- (1) 学生生活関係担当では、「下宿・貸間、アルバイトの紹介」、「学割、通学証明書の交付」、「掲示と印刷物の配布」、「保健衛生、体育施設の使用手続き」、「遺失物、拾得物」、「身上の異動」、「課外活動のための諸届」、「入学料免除、授業料免除等」、「奨学生の採用」などを取り扱っています。

なお、「学割等」の発行については、各

自の学生証（IDカード）を使用して、1～4番窓口の廊下の奥に設置してある「証明書自動発行機」から交付を受けることになります。

以下に手続きをする際の留意点を上げます。

• 保健衛生について

この川内北キャンパス内の西方にあります本学の「保健管理センター」では、学校医と看護婦が常駐して、皆さんの健康相談や保健体育の授業が困難な学生のために、保健体育教官などと連絡をとり、保健指導を行っていますので利用下さい。

また、学生からの修学上の問題、進路選択や日常生活の問題等については、クラス指導教官と相談しながら、助言を得られるようにしております。特に、精神的または健康的不安などについては、カウンセラーが十分に、プライバシーに配慮しながら相談を受ける体制を採っています。他方、学生第二掛でも、個人のプライバシーに十分留意した上で、学生指導教官などへ連絡することとしています。

• 体育施設等の利用について

大学に「団体届」を提出したサークルや同好会が活動のため、必要に応じて利用できる施設は、次のとおりです。

「課外活動共用施設」、「厚生会館」、「体育館」、「グラウンド」、「教室」、「テニスコート」、「川渡共同セミナーセンター」

なお、使用申し込み、使用時間帯、使用上の注意事項などについては、「学生生活案内」を参照するほか、各施設の窓口で確認し利用して下さい。

- 遺失物・拾得物について

川内北キャンパス構内での拾得物は、学生第二掛のショーケースに保管しています。中には、自動車免許証や学生証などもありますので、各自持ち物には氏名、学籍番号などを明記するよう心掛けて下さい。

- 身上の異動について

本人並びに保証人の住所変更、本人の戸籍上の変更などは、すぐ届け出て下さい。

- 授業料免除について

出願に際しては、色々と要件がありますので、事前に「学生生活案内」を参照するか、担当窓口でよく確認して下さい。

出願時期は、前期分（4～9月）と後期分（10～3月）の年2回行われます。

- 日本育英会などの奨学生

いずれの奨学生募集についても、応募手続き期間が短い場合が多いので、掲示内容に気をつけて下さい。大学を経由せず、直接、各自が出願手続きをする場合でも、大学の発行する推薦書等が入り用な場合、その書類作成に日数を要しますので、早目に申し込んで下さい。

(2) 履修、授業関係担当では、「履修関係」、

「授業関係（休講・補講・試験）」、「諸証明書発行」などを行います。

特に、全学教育科目の履修関係については、別途「シラバス」の中で、詳細な説明がしてありますので、割愛します。

授業関係その他の情報は、A棟南側の学生向け掲示板にそのつど掲示しますので、見落としのないよう日頃から注意して下さい。

(3) 授業料関係担当では、「授業料徴収」を行います。

- 納付期限

前期は4月（1年次学生は、原則として、入学時に）、後期は10月です。

- 納付方法

本学では授業料代行納付方式を採っていますので、概略を説明します。詳しいことは経理掛で尋ねて下さい。

代行納付者の銀行指定口座から引き落とす日は、

平成9年度前期分 平成9年4月24日

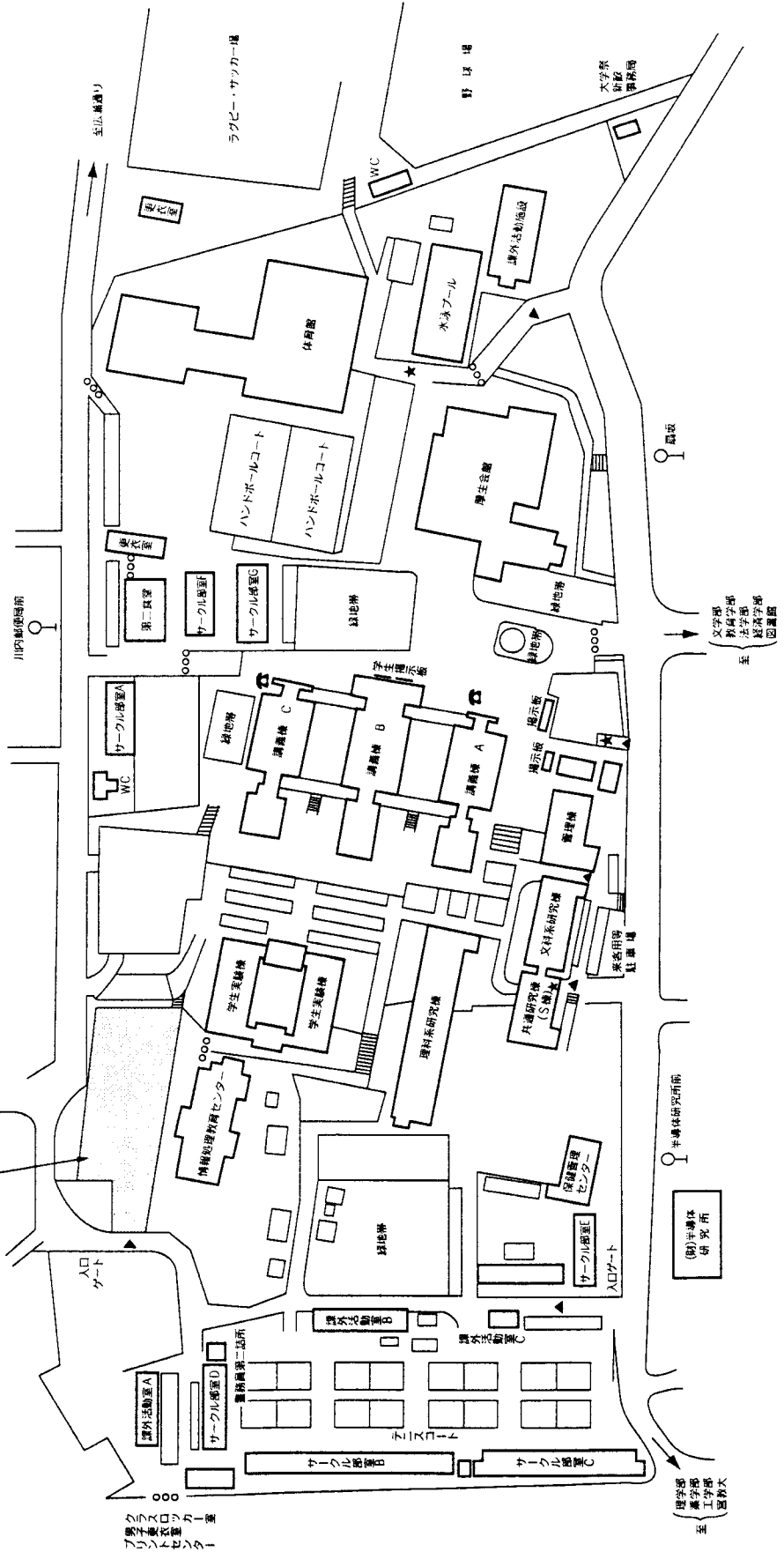
平成9年度後期分 平成9年10月28日

ですから前・後期分とも当該月の20日頃までに預金しておいて下さい。

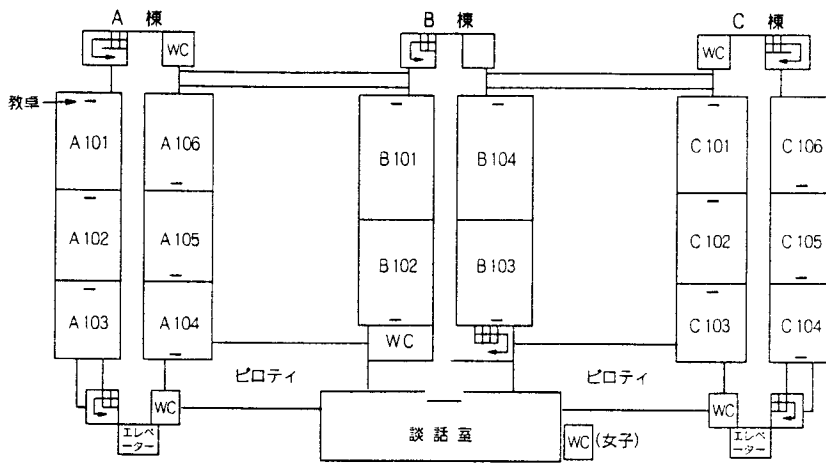
川内北キャンパス施設配置図

- ▲：自動車入口規制
- ★：二輪車進入禁止
- ooo：自動車進入防止ポール

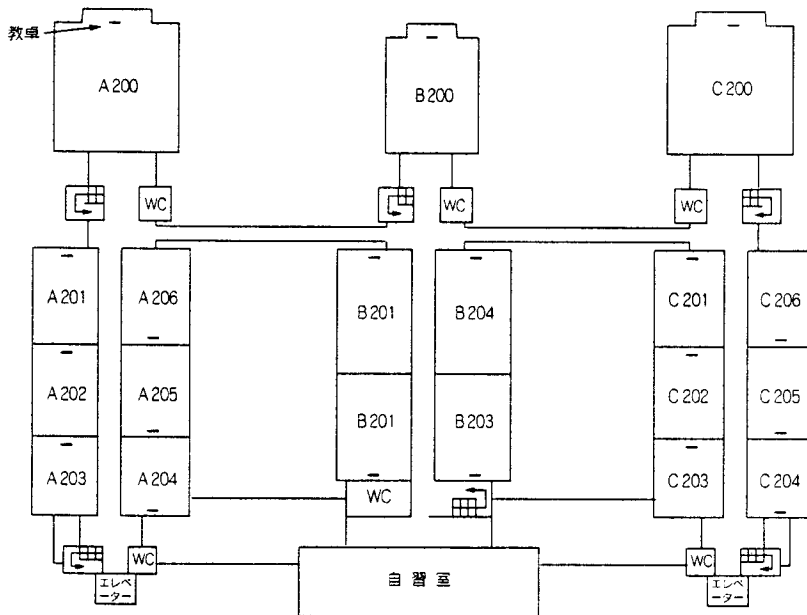
**非常勤講師・全学教育
科目担当者等駐車場**



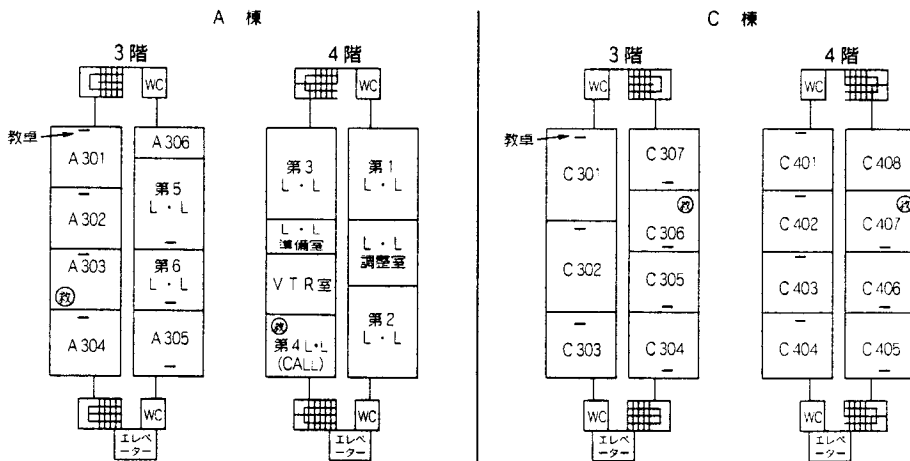
川内北キャンパス教室案内



1階



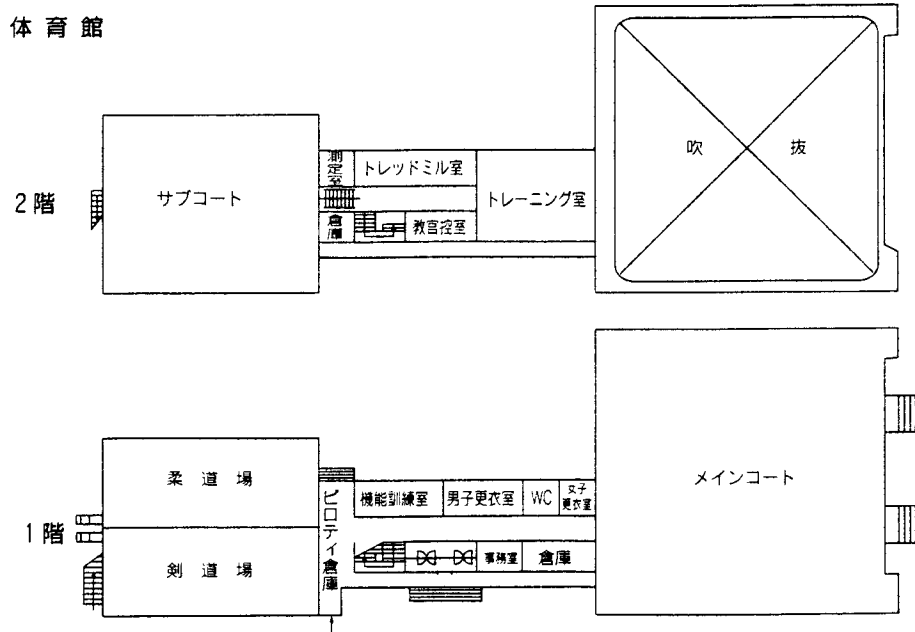
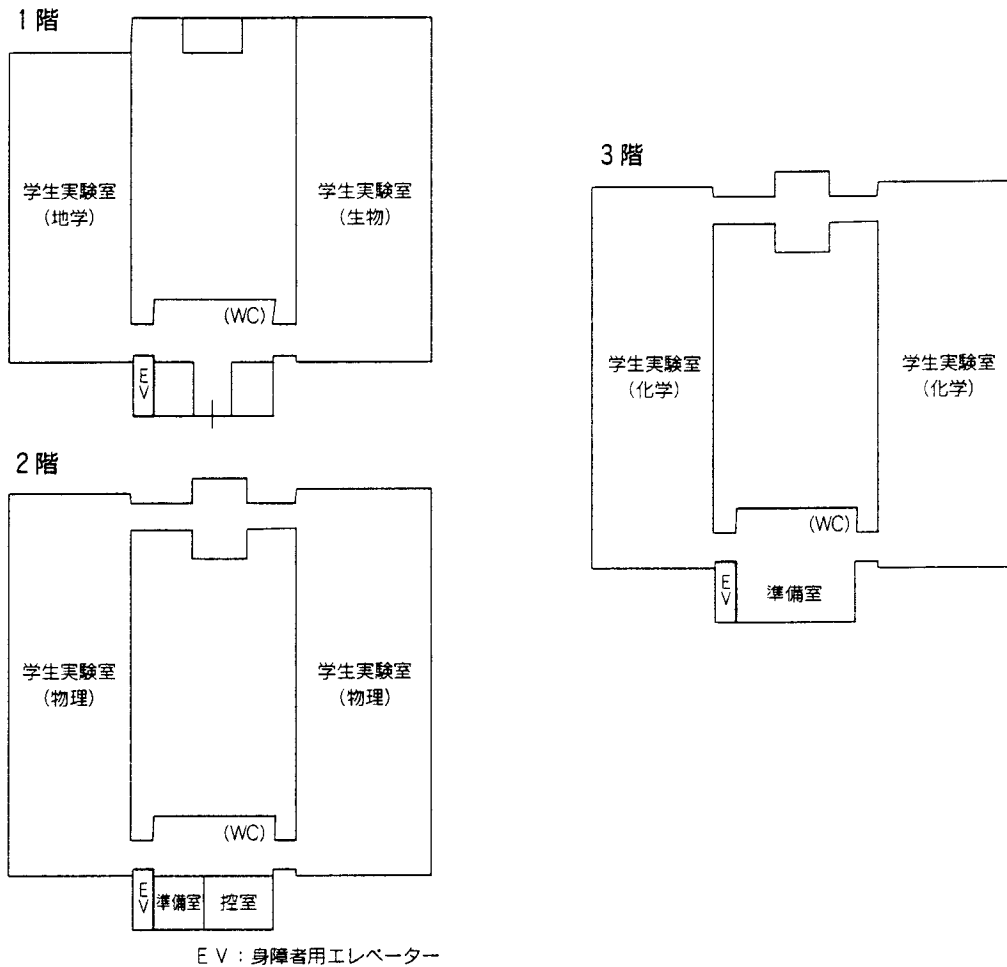
2階



※CALL=Computer-Assisted Language Learningの略称

Ⓜは救助袋の設置されている場所を示す。

学生実験室配置図



川内北キャンパスの交通規制について

新学期を迎え、構内に不慣れた二輪車（バイク・自転車）による通学者が急増し、構内の通路など禁止個所での駐輪が目につくようになり、構内・外での事故が危惧されます。構内での良好な教育・研究環境および交通安全の確保のため、川内北キャンパスでは次のような交通規制処置を取っています。

なお、学生の自家用自動車通学は、身体障害者または疾病等の理由以外では認めておりません。

新入生においては、交通安全と他人の迷惑とにならない交通マナーを心掛けるようにして下さい。

◇南門付近：扇坂・文科系4学部方向から構内への入口

- ① 二輪車で構内を通り抜ける時は徐行スピードで、厚生会館南側から利用できます。
- ② 二輪車は、管理棟隣および南門西側のD駐車場等を利用して下さい。
- ③ 構内南側の駐輪場は、収容台数が絶対的に不足しており、駐輪場はすぐ満車になるので、その場合は上記の通り抜け道路を通過して、プール脇やC駐車場で捜して下さい。

◇北門付近：川内郵便局前からの構内への入口

- ① 二輪車で構内を通り抜ける時は、徐行

スピードで第二食堂南側、ハンドボールコート、プール脇、課外活動共用施設（新設仮称）前を経て、通り抜けて下さい。

- ② 講義棟Cの北側B駐輪場が満車の場合は、学生実験棟北側のA駐輪場や第二食堂あるいは更衣室北側の駐輪場を利用して下さい。
- ③ 第二食堂付近は、生協関係の業者の物品の搬出入などを除いては、一切駐輪・駐車を禁止しています。

◇厚生会館北部付近

通り抜け道路のカーブ付近には、二輪車を放置しないで下さい。混雑の原因になる場合は放置二輪車を移動することもあります。注意して下さい。

◇文科系研究棟・理科系研究棟・学生実験棟付近

文科系研究棟南側の入口と理科実験棟南側の入口を結ぶ道路は、自動車以外は侵入できません。

☆なお、構内の各駐車場は登録車両の数に基づいて設定されているので、無許可の自動車は二重の意味でスペースを狭くして、消防車・救急車等の侵入を妨げるので、注意して下さい。

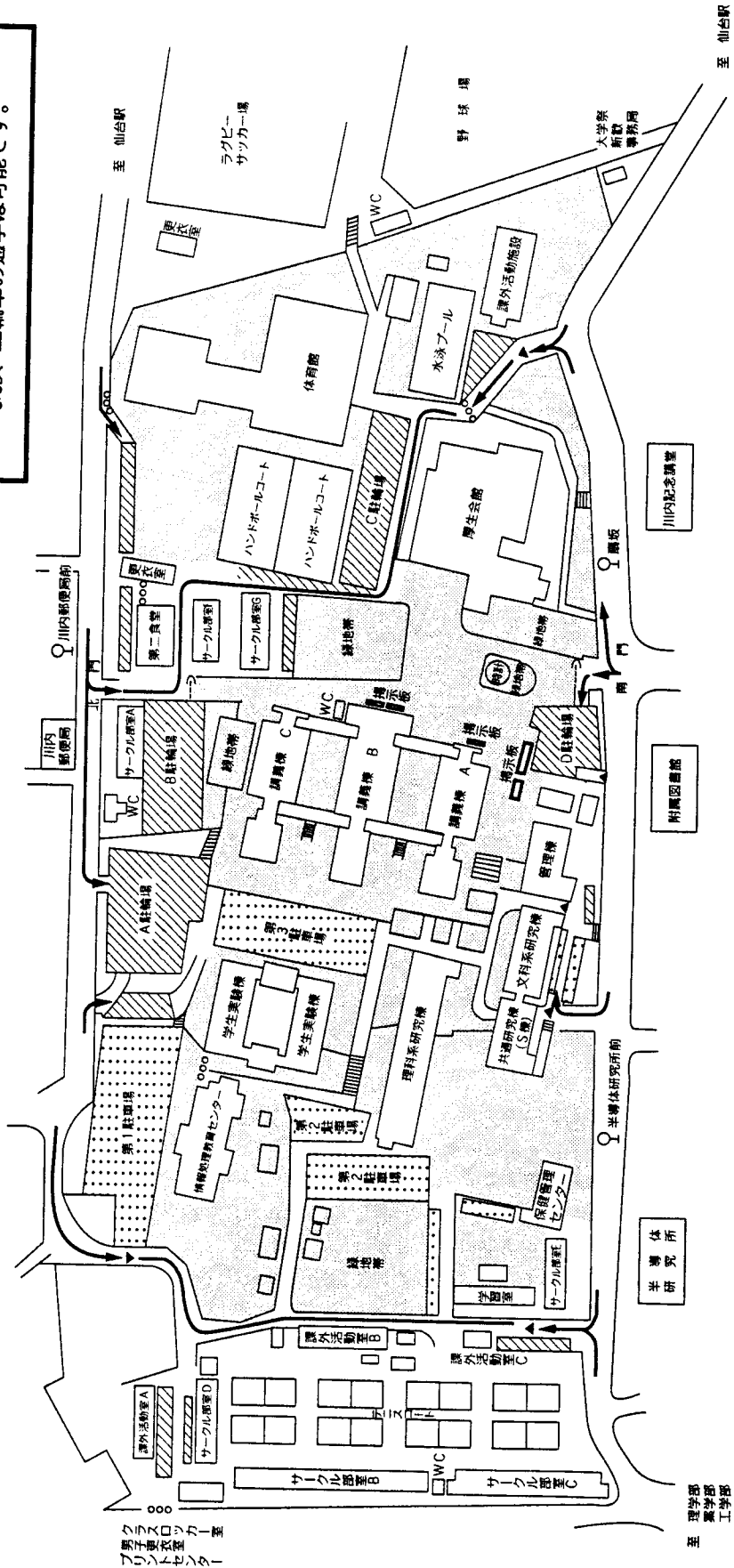
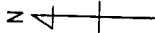
川内北キャンパスの各駐車場および各駐輪場は、次の図面のとおりです。

平成8年4月1日現在

川内北キャンパス交通規制図

自家用自動車による通学の禁止について
 キャンパス内の教育・研究環境を維持するため、川内北キャンパス地区においては、学生の自家用自動車通学は身体障害者又は疾病等の理由以外は認められません。
 なお、二輪車の通学は可能です。

- 凡 例
- ▨ バイク・自転車駐輪場
 - ← バイク・自転車通行路
 - バイク・自転車通行路
 - ▲ 駐輪場
 - 二輪車進入抑止柵
 - 自動車進入防止用ポール
 - ▲ 自動車入口規制
 - バイク・自転車乗り入れ禁止区域



理学部
農学部
工学部
至



あ と が き

- * 新入生の皆さん入学おめでとう。また春が巡り新入生を迎えたことで、ここ川内北キャンパスにも活気が戻ってまいりました。いよいよ諸君の大学生活のスタートです。自活・自立を心がけ新生活に力強く挑戦しよう。
- * さて、この1年を振り返ると、東北大学の大きなニュースとしては西澤潤一前東北大学総長が阿部博之総長と交替したこと。また、全学教育の責任部局である大学教育研究センターとしては、改革と同時に歩み始めた専任教授が相次いで退官されたことが上げられます。
- * 退官されたのは、前センター長の渡部治雄先生と蛸子栄昉先生のお二人です。お二人とも大学改革を経験されたうえで、渡部先生は西洋史の「歴史と文化」、蛸子先生は「化学」をそれぞれ担当し、2年生以上の諸君はじかに授業等で接触されているので、懐かしく授業風景を思い出されることでしょう。
- * センター長には、平成8年5月31日付けで江幡 武理学研究科教授、渡部先生の後任に関内 隆教授、蛸子先生の後任に斎藤紘一教授がそれぞれ就任し、人身が一新されました。これを機会にセンターが、今後ますます斬新さを発揮し前進することを祈って止みません。
- * 新入生諸君においては、一日も早く新天地に慣れ、自分なりの生活を創造して、大学生活をエンジョイしてはいかがですか。

なお、本広報に掲載して欲しい要望や投稿を希望する学生は、大学教育研究センター長あるいは国際文化研究科等事務部教務第一掛か同第二掛に原稿等を送付してください。